

ああああ

ああああ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

あああああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

あああああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

あああああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

ああああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

ああああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

あああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

あああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

ああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

ああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ

ああああ。

ああああ

ああああ

60

३५

一〇四

あああ

あああ

あああ

あああ

ああああ。

ああああ

目

次

1

ああああ

ああああ。

あああああああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

ああ

ああああ。

あああ

ああああ。

ああ

ああああ。

あああ

ああああ。

ああ

ああああ。

あああ

ああああ。

ああ

ああああ。

あああ

ああああ。

ああ

ああああ。

ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

作者 ああああ

なんだこれ？

最初に見かけたときは、変な文字化けか何かだと思つたんだ。
なぜなら、その『作品』は。

読者数が二十万人はいる、この国でも有数の、とある有名な小説投稿サイトの日間ランキング一位に居座っていたから。

一位だぞ。一位。わかるかこの重み。この価値。

たぶん作者にしかわからない。投稿している者にしか理解できない。

そういうオレも、そんな小説投稿サイトを利用しているひとりで、高校生になつたくらいからシコシコと投稿している。もうあれから六年も経つていて、オレは大学三年生。そろそろ友人たちはみんな就職活動にシコシコせいをだしている中で、オレはまだなにもしてない。あわよくば小説家になればなんて甘い幻想を抱いていたからだ。

はつきり言おう。

それは非常に難しい。

ウェブで小説家になるためには、投稿した作品が累計ポイントで五万点以上はとらないといけないらしいが、オレの作品は一度もその点数に到達したことはない。原因はわりかしひつつきりしている。

ランキングだ。

日間のランキングに載らない作品は、存在していないも同じ。基本的に読まれない。読まれないということは、評価もされないし、感想の数も少ない。存在の価値がない。死んでしまえばいい。

読者も暇じやない。これだけ娯楽に溢れた世の中だ。わざわざ刺激の少ない小説という媒体を好きこのんで消費するやつなんてほとんどいない。

そのわりに書くほうは絵を描いたり動画を作つたりするよりもお手軽にできるから、わりと簡単にできる。できると思つてしまふ。

だから、供給のほうが絶対的に多い中で、生き残る必要がある。ランキングはわかりやすいファイルターとして機能しており、読者のほとんどはおもしろい作品や楽しい作品を判断したりしない。

つまり大多数の読者はランキングの上位から、自分好みの作品を適当に読み漁り、適当に点数をつけていく。食い散らかし、食べ散らかし、ステーキの脂身だけを食べていく。おいしいもんな脂身。

あとは、パンドワゴン効果によつて、点数が点数を呼ぶ。作品自体のおもしろさなんてものは置き去りにされて、ただ脂身、贅肉、そういった作品外の部分——、その作品が有名になることで、さらに評価されていくんだ。

オレが書籍化もできず、たいした点数もとれず、それでもほそぼそと書いている理由は、不透明な未来に嫌気がさした現実逃避だつたかもしれないし、誰かに認めてもらいたいという歪んだ自己承認欲求だつたかもしれない。

でも、そんなちっぽけな自尊心を満たすことすら、このサイトでは許されていなかつた。

ランキングに載れないからだ。

ランキングに載るということは、それほどの重い。それほどの価値がある。

一位になれば、もはや背中に翼が生えるようなものだ。

なのにだ。

さすがにわかりかねた。

意味がわからなかつた。

ランキングの一位に載つていたのは、冒頭の意味のないようと思われる、あの奇妙な文字の羅列だつたからだ。

ああああ。

意味わかんねえ。

いくら読者様が自己判断もしないランキングやパンドワゴン効果に流されるだけの存在だとしても限度があるだろうがよ。

そんなに思考停止したロボットみたいな存在なのかよ。

感想欄を覗いてみる。

『すごく感動的なお話で感動しました』

『おもしろかつたです。次の話も期待しています』

『ああああああ。萌えあああああ』

『主人公のかっこよさが印象的でした』

『作者様は天才ですね。こんな画期的な話を思いつくなんて』

いやいやいやいやいやいやいや。

なに考えてんの？

それとも考えてないの？

オレには読者がわからない。

読者に對してむしょうに腹立たしい思いがする。おまえらそんなもんじゃねーだろうがよ。ちゃんとおもしろいものや楽しいものを選り分ける能力があるだろうがよ。

(つまりオレの作品はおもしろいのをわかつてくれよオマエ様)

読者には判断能力がないというのは本当だと思わなくもない。

なぜなら複垢しようが、相互評価しようが、面白そうな設定を丸パクリしようが、バレンタインは問題にならなければ、書籍化なんかは簡単にできてしまうからだ。

実際にそういうた作品があると聞いた覚えがあるし、オレも実感としてランギング上位の作品がなにか似ているなと思つたことは何度もある。

だから、オレの実感としては、そういうた不正とまでは言わないがフエアじやないやり方に対して、読者のほうは抵抗するだけの力がないつて感じている。

まるで政治と同じだな。これじゃダメだとみんなが思つてているけど、結局は金持ちと権力を持つているやつが勝つように、やつたもん勝ちみたいな世の中になつていてる。

あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ
あ あ あ

大学の講義を適当に受けていると友人のAが話しかけてきた。

わかつてるとは思うが、友人もオレもそれなりにオタクで小説とかを読むのが趣味の陰気なやつだ。ちなみにオレは小説を書いていることをだれにも言つてない。こんな恥ずかしい趣味を誰かに言うなんて狂氣の沙汰に違ひないからだ。

そんなわけで、Aとはあくまで消費者としての談義をする。

「なあ。小説サイトの一位のやつ読んだか？」

「あれか」

意味わかんねえよな。と続けようとした。

そしたら。

「いやあ、すげえ作品だつたわ。面白さ天元突破しちゃつてたわ」「お？ おお……」

な。なんだ？

こいつもあの作品がおもしろいとか思つちやつてる系なわけ？

「あの。つかぬことを聞くんだが」

「なんだ？」

「あの作品のどこがおもしろいんだ？」

「え、おまえあの作品のどこがおもしろいかわからんねーの？」

「わかるかよ」

「おまえの感性、死んでるなあ」

「うつせーな！」

「いやいやいや、怒るところじやねーベ。純然たる事実だろ。きっとあの作品アニメ化までいくつて。映画化もされると思うぞ」

Aの視線は本気だつた。

嘘とか冗談で言つてるようには思えない。

なんだ。オレの感性が変なのか？

家に帰つたあと、オレはもう一度あのサイトを見てみた。

あの変なランキング一位の作品は削除されているかと思つていたが、そんなことはなかつた。

これ以上ないほどに特徴的なタイトル。

『ああああ』

まだランディング一位に君臨していた。

通常、小説サイトではビジュアルによる刺激がないため、タイトルやあらすじを看板にするしかない。

したがつて、本文よりもむしろタイトルやあらすじにこそ力を入れるべきだという考えがある。特にあらすじすら読まない読者がいるから（そいつらは何を読んでるんだつて話だが）タイトルを特徴的に

する。

つまり、タイトルで釣るのが必須ということになる。

タイトルで釣るということは、それなりに長文でなければならぬから、タイトルがあらすじ化することもある。

例えば、オレが書いている作品は『ヒットポイントの限界値が999の世界でオレだけHP9999なんですが、タンク役は嫌なので、のんびり農家をやりつつ、幼馴染や奴隸少女とハーレム生活していた森の賢者と呼ばれるようになりました』というものだ。

たぶん、20年後には、タイトルが作品自体になるだろう。

考え方はいろいろあるだろうが、広告や宣伝というものがまつたく必要ないということはないよう思う。

バツハは死んでから有名になつたけど、死んだあとに有名になつたかどうかなんてオレにはわからないし、生きているうちに賞賛を浴びたい。読まれなくてはならない。読まれなれば意味がない。

たとえ書籍化するというのが最終ゴールじゃないにしろ、オレのよううに誰かに承認されたいという薄暗い欲望だとしても、だ。

読まれなければ存在していないのと一緒なんだ。透明な存在なんだよ。

かといって、規約に違反するような行為をしたいわけじゃない。オレは有名になりたいが、作品自体の質がよければ、自然と……、あくまで気にするところなく、ランキングは上がっていくものだと思つてているし、そういうものだと信じたい。

しかし、実際には作品というものは読まれることによつて完成するのだから、広告するということも作品の一部だという考えがあつて、そのどちらも正しいとオレは直観している。

ランキング一位の意味不明な作品は、確かに死ぬほど読まれている。

ユニークアクセス数はオレの五千倍。え、五千倍？

嘘だろ。今までのこのサイトの読者数を軽く越えてるぞ。

これではつきりした。

この作品はきつと不正をしている。

複垢なのか相互評価なのか、それとも評価BOTを走らせているのかはわからないが、こんな作品がランкиング一位なわけはない。

いくら感性が人それぞれだからといったって、こんな意味不明な作品にみんなが高い評価をつけるわけがない。

「ん。じゃあ、感想もBOTか?」

そういうことになる。

そうじやないとおかしい。

オレは感想欄を見てみる。

昨日の軽く十倍ぐらい書かれていた感想を。

『やべええ。超胸熱展開』

『主人公が輝いて見えます。素敵です』

『歴史に残る超名作』

『作者様、オマエがナンバーワンだ』

『もうこの作品があれば、他の作品はいらないな』

なんだ。

なんなんだよ。

こんなふざけた作品で……意味も分からずみんな悪ノリしているのか。

投稿された二話目を見てみると、やっぱり同じく『あ』の羅列。もしかして、暗号かなにかなのか?

それとも、オレのパソコンだけおかしくなっているのか?

それとも……、オレがいかれちまつたのか?

オレの感性は正直などころゴミくずみたいなものだろう。べつにオレだってこの六年間でまったく感想をもらつてこなかつたというわけじゃない。そこそこにはもらつてきた。

そうやって読者を単なる数としてカウントしてしまったのも嫌で、交流して仲良くなつた人もいるつちやーいる。

だけど、どうしてもランキングには載れない。

いまいちばつとしない。

読者の見る目がないと思ったこともあるが、こんだけ長く続けていると、それがそうじやないにしろ、少なくともオレと読者の多数派と

は合わないんだろう。

だつたらテンプレ書けよつて思うやつもいるかもしない。テンプレっていうのは、このサイトで一番読まれる形式で、少なくとも中身はどうであれ入り口のところで一番読まれるタイプの作品を選択したほうがいいってことだ。

それはわかる。

作者もウェブで公開する以上は、その作品をできる限りたくさん的人に読んでもらいたいと思つてゐるはずで、その思考様式に従えば、論理的な帰結として、読まれる作品タイプを選択すべきだということになる。

だつたら、テンプレをはずす意味はない。

そうやつたら作品の個性が死ぬ？

そんな考えもあるかもしねりないが、だつたら文句をいうな。

読まれないことに文句を言うな。

十倍ぐらい面白い作品を書けばテンプレ作品と同じくらい読まれるかもしれないから、そこを目指すべきだろと思う。

こんな裏技みたいな方法で、どうやつたかは知らないがランキング上位にきやがつて。オレの憧れの……六年間も費やしてついぞどれなかつた場所を易々と奪い取つていきやがつて。

読者も読者だ。

こんなわけのわからない作品を賞賛するとか、頭おかしいんちやうか？

おそらくBOTがかなりの数まぎれこんでいるだろうが、おそらく本当に生身の読者が書いている感想もあるだろう。

ノリで書いている。

いや、それもまた悪いとは言わない。読者には作品を読む権利があるし、好きなように感想を書く権利もある。

誹謗中傷にならない限り、あるいは規約違反にならない限りは、ほとんど何をしてもいい。

作者が規約に反しないなら自由に作品を書いて公開してもいいよう、それと等価交換になつてゐる。

だからノリで感想を書いてもいいだろう。

しかし、不快で不快でしようがない。それはオレが少なくともこの六年間、眞面目に小説に取り組んできたと思っているからだ。

ふみにじられたと思つたからだ。

たつた六年ぽっちしか書いてこなかつたけど。

それでもオレの人生の四分の一くらいは捧げてきたんだ。

どうして、こんな意味のないものが評価されるんだ?

わからない。わからない。気持ち悪い。世の中が気持ち悪い。

あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

オレはその作品の感想欄にあらん限りの罵倒を書きこんだ。

今まで創作ですら使つたことのないゴミのような言葉を書きこんだ。これで垢バンされるかもしれないが、それはそれでいい。

こんな作品を一位のまま放つておく運営も運営だ。

もしオレを垢バンするなら、そんな運営、こちらからお断りする。正義の鉄槌である。

こんなにも文学的行為はない。

今までこれほどまでに筆が載つたことはなかつた。

人生で初めて、歴史に残るようなクソ名文が書けたように思つた。すぐに、反論はきた。

作者からのものじやない。そもそも作者は投稿以外の何もしてい
ない。

つまり、読者からの反論だつた。

『この作品の良さがわからないなんてかわいそうですね』

『嫉妬じやね? こいつも書いてるみたいだぞ』

『ゴミクズ作品書いているゴミ作家がイキつちゃつたかー』

『さつさと作品消せよ。あ、この感想も消しといてね』

『気持ち悪いコメントだな。マジでこいつ頭おかしいんじやね?』
うつせーよ。

おまえらは単に大衆側に迎合しているだけだろうが。

こんなどうでもいい作品をみんなで寄つてたかって持ち上げてい
るだけだろうが。作者様の顔に精液ぶつかってるだけのクズドモが
死ね死ね死ねええええええええええええええええええええええええ
結すつぞ。おまえらいっしょに仲良くホモセックスしてろ。あああ
あああ。きめえ。ぶつかけてくんな。

そんな憤りをオレは盛大にぶちまけた。

それから十分後、オレは無事、垢バーンされた。

あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ

大学を卒業した後、オレは地元の中小企業になんの面白みもなく就職した。

ほとんど同時期に例の作品はやつぱりアニメ化してドラマ化して映画化までした。ハリウッドについて、意味のない演技をしているアクターを見ていると、この世界はいつたいどうなつてしまつたのかと思つた。

もしかして、オレは異世界に転移してしまつたのだろうか。
いざれにしろ。

その内容はオレには理解できなかつたし、理解できないものを語る資格はないのだろう。

あの小説サイトを見てみると、まだあの作品は掲載されていて、しかも、ぶつちぎりの一位になつていて、やつぱり訳がわからない。

だからオレはふと思ついたことを実行するにした。
あの意味の無い羅列を投稿することにしたんだ。

ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ。

ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ

ああああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ

ああああ

ああああ

あああああああああああああああああああああああああああああああああああ

あああ

ああ

あああ。

ああ

あああ。

ああ

あああ。

ああ

あああ。

ああ

あああ。

ああ

あああ。

あああ

あああ。

あああ

あああ。

あああ

あああ。

あああ

あああ。

結果は絶賛の嵐だった。

あのあと、書籍化のオファーが来て、アニメ化、ドラマ化、映画化、
ハリウッド映画にまでなつちました。

その賞賛はまちがいなく本物だ。

オレにはひとつともオレの作品の価値がわからないけれども、みんな
はソレが好きらしい。

金も女も手に入つたし、会う人会う人、オレを先生だと持てはやしてくる。

オレの日産スピードはとてつもない。なんせ『ああああ』と書くだ
けだからな。ストーリーもキャラも、プロットもなにも考えてない。

ああああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ。

ああああ

ああああ

ああああ

あああああああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

あああ。

あああああああああああああああああああああああああああああああああああ

あああ。